



Title	周縁アラビア語における喉頭化音 : アラビア祖語強調音の再建に向けて
Author(s)	仲尾, 周一郎
Citation	アラブ・イスラム研究. 2018, 16, p. 71-92
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105987
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

周縁アラビア語における喉頭化音
— アラビア祖語強調音の再建に向けて —

仲尾 周一郎

**Glottalic Reflex in Peripheral Arabic
— Towards Reconstruction of
Proto-Arabic Emphatics —**

Shuichiro NAKAO

抜 刷

「アラブ・イスラム研究」第16号 2018年

Journal of Arabic and Islamic Studies

مجلة الدراسات العربية والإسلامية

Vol. 16, 2018

周縁アラビア語における喉頭化音 —— アラビア祖語強調音の再建に向けて ——

仲 尾 周一郎*

Glottalic Reflex in Peripheral Arabic —— Towards Reconstruction of Proto-Arabic Emphatics ——

This paper argues that there are cases of glottalic reflexes of Proto-Arabic *q and *t (as ejectives, implosives, or glottalized consonants) in Arabic loanwords in some Caucasian and African languages and some peripheral Arabic varieties that can hardly be explained as a contact-induced language change. Based on this finding as well as other evidence from relevant philological and articulatory phonetic studies, the author suggests to reconstruct two glottalic (or [+constricted glottis]) plosive emphatics (for *q and *t) and three non-glottalic sibilant emphatics (for *ṣ, *ḍ and *ḏ) for pre-diasporic Proto-Arabic.

1. はじめに¹⁾

現代標準アラビア語 (Modern Standard Arabic、略号 MSA) の規範音では歯茎破裂音として実現する子音 /d/ [dʰ] <ض> は、古くは側面開放を伴う摩擦音／破擦音 (例えば [kʰ]/[dʰkʰ]/[ðʰ]) であったという仮説は今日広く支持されている (Cantineau 1960: 55; Al-Nassir 1993: 44–46; Versteegh 2014: 87)²⁾。その主たる根拠としては、(i) セム祖語 (Proto-Semitic、略号 PS) に再建される対応音素 (側面破擦／摩擦放出音 *ḏ [ʰdʰ]) との音声的整合性³⁾、(ii) シーバワイヒなどの中世アラブ文法家による古期のアラビア語における /d/ の実現に「側面開放」が随伴するとする音声記述との整合性、(iii) イエメン・モーリタニア・トルコなどの一部におけるクルアーン朗読の

* 大阪大学大学院言語文化研究科助教

- 1) 本稿では必要に応じ // で音素表記、[] で簡易音声表記・素性表示、<> で文字素表記を行う。アラビア語音素表記には Cowan (1979) の転写を以て代えるが、ḏ を以て Cowan の z の転写に代える。その他の言語についてはラテン文字正書法表記あるいは IPA に基づく音素表記を行うが、註釈が必要な場合は適宜初出箇所を逐一その音声実現を示す。その他、略号としては ES (エチオピア＝セム諸語)、MSA (現代標準アラビア語)、CA (古典アラビア語)、PA (アラビア祖語)、PS (セム祖語) を用いる。本稿の初稿について貴重なコメント・データを頂いた塩田勝彦氏、若狭基道氏、岩月真也氏、並びに匿名の査読者に、ここに記して感謝の意を表します。
- 2) 後述 (2.2節) のとおり、PA におけるこの子音の有声性については疑問が呈されている。なお、いわゆるアラビア語「強調音」の音声実現としては、咽頭化音・喉頭蓋化音・口蓋垂化音・軟口蓋化音としての記述が提示されているが、本稿では慣例に従い「咽頭化音」として記述する。
- 3) 同子音は現代南アラビア語に在証される (Kogan 2011: 72; Watson & Al-Azraqi 2011)。

地域変種、アラビア半島南西部の一部の現代アラビア語方言あるいは混成言語⁴⁾、スペイン語や東南アジア・アフリカ諸語などへのアラビア語借用語⁵⁾ 等におけるアラビア語 /d/ の側面音的な反映が挙げられる。以上のうち直接観察可能な証拠は (iii) のみであり、セム祖語の子音の再建や中世アラブ文法家らによる音声記述の解釈に対する補足的根拠となっている。つまり、この比較言語学的論証では、言語接触の事例 (周縁的な、あるいは混成的な言語変種や借用語における反映形) が重要な役割を担っている。

本稿の目的は、上で述べた古期のアラビア語 /d/ の音声実現の推定と並行的な議論、すなわち言語接触の事例を中核的な証拠とする議論により、アラビア祖語 (Proto-Arabic, 略号 PA)⁶⁾ における「強調音」(emphatic)⁷⁾ の共時的音声実現について考察を加えることにある。この目的のため、本稿ではセム祖語 (Proto-Semitic, 略号 PS) の「強調音」が喉頭化音 (glottalic)、すなわち喉頭気流機構により産出される放出音 (ejective)・入破音 (implosive)⁸⁾ として反映している事例について歴史言語学的解釈を行い、PA. *q, *t (< PS. *k, *t) は喉頭化音、*š, *ḏ, *ḏ (< PS. *š, *š, *t) は非喉頭化音として再建できる可能性を主張する。これにより、一部の先行研究で主張されてきた、有声 (非喉頭化) 破裂音としての PA. *q, *t の再建は棄却される。

ただし、本稿では議論の複雑化をさけるため、複数の通時的音韻変化の相対年代、および個々の語について PA に再建可能か否かについては議論せず、便宜的に古典アラビア語 (Classical Arabic, 略号 CA) の形式を音声実現の再建に利用する。本稿の範囲では、PA. *q, *t はそれぞれ CA. /q/, /t/ と一意的に対応するものとする。

2. セム祖語とアラビア祖語における強調音の再建

2.1. 伝統的再建

今日、セム祖語の舌頂音・舌背音の一部には、喉頭素性 (laryngeal feature)、特に有声性 ([±voice]) および声門狭窄性 ([±constricted glottis]、略号 [±cg]) について、表 1 のような三段階の音素対立がみられたことについては、広く意見が一致している (Cantineau 1960: 292; Dolgopolsky 1977; Kogan 2011; Al-Jallad 2015)。

4) イエメンのジャバル・ラーズィフ (Jabal Rāziḥ) で話される、古代南アラビア語とアラビア語の混成言語と考えられる「ラーズィヒー語」(Watson et al. 2006; Watson & Al-Azraqi 2011) など。

5) 例えば、CA. (ʿal=)qādī、スペイン語 *alcalde* 「市長」、(古風な) マレー語 *kadli* 「裁判官」、フルフルデ語 *alkaali* 「村長、裁判官」、ソマリ語 *qaalli* 「裁判官」など。

6) 概念上、Owens (2006) は中央セム祖語から分岐した「アラビア祖語」(Proto-Arabic) とアラブがアラビア半島外に拡大した7-8 世紀以前の段階である「前離散期アラビア語」(Pre-diasporic Arabic) を峻別しつつ、再建に利用できる言語資料が同一であるために、この二つは結果的に同一形式をもつことを示唆している。これに対し、本稿では実質的に再建可能なアラビア祖語の最新の状態 (≡Owens のいう「前離散期アラビア語」) を「アラビア祖語」と呼ぶ。

7) 一般的にはアラビア語については共時的形態音韻論の振る舞いなどに基づき /q/ は「強調音」とは扱われないが、本稿では便宜的に「強調音」として扱う。

8) 本稿では声門音 (glottal stop)・声門化音 (glottalized) は「喉頭化音」に含めない。

表1. セム祖語における喉頭素性に関する音素対立の再建

*d	*z	*ḏ [ḏ]	(*l)	*g	[+voice, -cg]
*t	*s	*ṭ [θ]	*š [ʃ]	*k	[-voice, -cg]
*ṭ [tʰ]	*š [ʃʰ]	*ṭ [ʰθʰ]	*š [ʰʃʰ]	*k [kʰ]	[-voice, +cg]

これらのうち [-voice, +cg] の素性をもつ子音群 (放出音) は、セム言語学において慣習的に「強調音」(emphatic) と呼ばれる。この「強調音」の放出音としての再建は、大部分のエチオピア＝セム諸語や現代南アラビア諸語における「強調音」が放出音としての反映をもつこと⁹⁾、形態音韻論的根拠からアッカド語でも放出音としての実現をもっていたと推定できること、祖体系の音韻構造の通言語的な自然さなどに依拠している。

これに対して、大部分の現代アラビア語諸方言や現代アラム語諸方言の強調音については、PS の放出音性が失われ (以下「脱喉頭化」(de-glottalization) と呼ぶ)、舌頂強調音は肺気流咽頭化音として (例えば MSA では、PS *ṭ [tʰ] > MSA. /t/ [tʰ]、PS. *š [ʃʰ] > MSA. /s/ [ʃʰ]、PS. *ṭ [ʰθʰ] > MSA. /ḏ/ [ḏʰ]、PS. *š [ʰʃʰ] > MSA. /d/ [dʰ])、舌背強調音 PS. *k は、基本的には PS. *k や PS. *g との対立を何らかの形で保持しつつ、肺臓気流 (pulmonic) 舌背音 (例えば [q, ɢ, k, ɡ, ɣ]) として反映している。この言語事実の解釈として、従来のセム語比較言語学では、PS の強調音からの脱喉頭化 (・有聲化) を伴う口蓋垂音化・咽頭化は、中央セム語派ないしアラビア語の分岐に伴って発生した改新と考えられてきた (Hetzron 1976; Kogan 2011; Huehnergard 2017)。

加えて、従来のアラビア語研究では、MSA 規範音では無声音である /q/, /t/ は、古くは有声音 (例えばそれぞれ [q/ɢ], [dʰ]) であったとする推定も行われ、一定の支持を集めてきた (Cantineau 1960: 31–32, 67–71; Al-Nassir 1993: 35–38; Versteegh 2014: 120)。この有聲性に関する推定は、一部の現代アラビア語諸方言における PA. *q, *ṭ の有聲音としての反映、および紀元 8 世紀にシーバワイヒが *al-Kitāb* において提示した “*majhūr*” – “*mahmūs*” と呼ばれる対立素性の現代音声学的解釈を主たる根拠としている。MSA 規範音では、シーバワイヒによって “*mahmūs*” とされる子音は全て無声音、“*majhūr*” とされる子音は大半が有聲音として実現しているが、/q/, /t/ (および声門閉鎖音 /ʔ/) は “*majhūr*” 子音とされている。本節で述べた先行研究においては、PA. *q, *ṭ が有聲であると考えれば、これらの術語は「有聲・無聲」の対立と同定できる、と主張されてきた¹⁰⁾。

つまり、中央セム語ないしアラビア祖語では「脱喉頭化」と「有聲化」(および「咽頭化」) が随伴的に生じたとする仮説が一定の支持を集めてきたといえる。

9) ただし、後述のとおり、近年の音響音声学的研究により、現代南アラビア諸語の強調音の音声実現に関しては単純に放出音とは結論付けられない実態が提示されている (本稿3.2節参照)。

10) なお、声門閉鎖音 /ʔ/ も *majhūr* とされているが、これについては有聲性と関わらないアドホックな説明が行われてきた (Al-Nassir 1993: 38)。

2.2. アラビア祖語での「脱喉頭化」と「有声化」に関する批判

しかし、以上の PA における強調音の「脱喉頭化」および「有声化」の推定に対しては、音声実態が観察可能なデータに基づき、これまでに音響音声学・文献学的アラビア語研究において、批判的な議論が行われてきた。

まず、文献学的研究においては、古期アラビア語のギリシャ文字転写では原則的に /k/ および /t/ は有気音 <χ> および <θ> として、/q/ および /t/ は無気音 <κ> および <τ> として転写されていること、古典アラビア語におけるギリシャ語・ラテン語借用語にも同様の対応がみられること (例: κιθάρα > qīthār 「ギター」、χημεία > kīmiyā' 「化学」、στράτα > širāt 「道」) などから PA. *q, *t が無気無声音であった可能性が指摘されてきた (Blanc 1967; Isserlin 1969; Odisho 2002; Al-Jallad 2017a, b)。さらに、その他の「強調音」についても、古いアラビア語ギリシャ文字転写、一部の現代アラビア語方言での反映、前古典期のアラビア語資料における借用語での反映などの根拠に基づき、古くは /d/, /d/ が無声音 (Al-Jallad 2015, 2017a)、/s/ が無声破擦音であった可能性 (Kogan 2011: 64–65; Al-Jallad 2014) が示唆されている。これらの研究は、PA (ないし前古典期アラビア語) において強調音が放出音であったとする推論が不自然ではないことを提示してきた。

以上の議論を補足するように、現代標準アラビア語の強調音に関する音響音声学的研究は、/k/-/q/ および /t/-/t/ の弁別は、単に調音位置に関する対立としてだけではなく、それに付随する有気性あるいは声門の開放／閉鎖 ([±spread glottis]、略号 [±sg]) の対立 (/k/, /t/ は有気音 [+sg]、/q/, /t/ は無気音 [-sg]) としても記述できることを証明してきた (Al-Ani 1970; Heselwood & Maghrabi 2015)。同様の報告はイラク (Blanc 1967, 1969)、ヨルダン (Khattab et al. 2006) などの現代アラビア語方言に対しても行われている。さらに、PA. *q が声門化音 [qʔ] かつ／あるいは PA. *t が咽頭化を伴う声門化音 [tʔ] として反映しているとする音響音声学的研究ないし音声学の観察が、中部パレスチナ (Na'im 1999: 157–158)、北部シナイ半島 (de Jong 2000)、中部・南部エジプト (Khalafallah 1969: 29; Fischer & Jastrow 1980: 208–209; Behnstedt & Woidich 1985)、北西アルジェリア (Marçais 1906: 108)、モロッコ都市部 (Heath 1997: 207) について報告されている¹¹⁾。これらの研究は、PA. *q, *t は無声無気音／声門化音であった可能性、majhūr – mahmūs の対立は現代音韻論における声門開放性と同定できる可能性を説得的に示してきた¹²⁾。

11) これらの報告では「声門化」(“glottalized”)という術語により記述が行われているが、この術語は過去には現代音声学でいう「放出音」あるいは広く「喉頭化音」を表すものとして使用されており、注意を要する。一部の先行研究は、これらの報告の「声門化音」を「放出音」と解釈しているようである (cf. Watson & Bellem 2010: 352; Huenergard 2017)。なお、カイロ方言等における PA. *q の反映である声門閉鎖音も弁別素性としては [-sg, +cg] と記述できる。

12) この可能性を支持する証拠として、Heselwood & Maghrabi (2015) は両術語を古代ギリシャや古代インド音声学における有声性の対立に関する術語と比定している。なお、古典シリア語においてもギリシャ語借用語はアラビア語と同様の対応をみせる (Odisho 2002)。

表2. セム祖語・アラビア語諸変種の子音対応 (網掛け部分は [-sg])¹³⁾

*k	*k̥	*t	*t̥	*s	*ʃ	セム祖語 (Proto-Semitic)
k ^h	q ^ʰ	t ^h	t̥ ^ʰ	s	s ^ʰ	現代標準アラビア語
k	g/q ^ʰ	t	t̥ ^ʰ	s	s ^ʰ	エジプト・ハルガ方言

つまり、上で述べた文献学的・音響音声学的研究群に基づけば、PA. *q, *t̥ は喉頭素性に関して PS と同じ素性 [-voice, -sg, +cg]¹⁴⁾ をもっていたことになり、アラビア祖語における改新はかつて想定されたほど大きな変化ではなかった可能性が示唆される。一方で、これらの研究による知見は、PA (あるいは中央セム語) のにおいて「脱喉頭化」、すなわち喉頭気流機構を用いる子音 (放出音・入破音) から、喉頭の狭窄を持たず ([-cg])、肺臓気流機構を用いる (pulmonic) 子音への変化が生じたか否かについては、直接再検討を行ってこなかった。

実際には、中部アフリカ (チャド・ナイジェリア)・リビア東部・アスワンなどの現代アラビア語方言においては PA. *t̥ が入破音 /d/ (Owens 1993; Watson & Heselwood 2016: 32) や [q̥] (Schroepfer 2015)、イエメン・ザビード方言では PA. *q, *t̥ が放出音 [kʰ], [tʰ] (Prochazka 1987: 59) として反映していることが報告されている。この事実は、事例の数が少なく、「普通でない (“unusual”)」(Schfoepfer 2015) 反映であるため、歴史言語学的研究の対象とされてこなかった¹⁵⁾。

しかし、これらの事例の解釈は、(i) PA において「脱喉頭化」が一旦生じ、話者が離散した後に、何らかの理由 (言語接触など) で再び喉頭化が生じた (以下「再喉頭化」(re-glottalization) と呼ぶ)、あるいは (ii) PA において脱喉頭化は生じていなかったという、いずれにしても新奇な二つの結論のいずれか (あるいは両方) に帰するという点で、潜在的に重要な問題を内包している。次節では、喉頭化音をもつ諸言語とアラビア語の言語接触の諸事例 (これらの事例を「周縁アラビア語」と呼ぶ) を検討し、PS 強調音の喉頭化音としての反映は、上記のような少数の現代アラビア語方言にのみみられる特徴ではなく、周縁アラビア語では一般的な傾向であることを示す。また、周縁アラビア語におけるこの反映には、再喉頭化を経たと考えべき事例も考えられない事例も存在すること、および後者の事例は PA. *q, *t̥ が喉頭化音であったとする仮説を導き出すことを議論する。

13) 本稿では無気性を [ʔ] にて明示する。

14) ただし、上記の諸報告は、声門狭窄性 ([±cg]) に関しては分析を行っておらず、現時点では声門の (ある程度の) 閉鎖を [+cg] と捉えることには課題が残る。Watson & Heselwood (2016) は喉頭素性に関して従来の [±sg, ±cg] を採らず、有気無声破裂音を [open]、有声音・放出音・無気無声破裂音を [closed] と解釈することを主張している。Blanc (1969) は、無声無気破裂音には一般的に声門の閉鎖が随伴すると想定している。

15) ただし、部分的ながら Hagège (1973: 56–58)、Décobert (1985: 58–64) はチャド南部のアラビア語方言における入破音 (原文では「声門化音」) について、セム祖語の喉頭化音との比較を行っている。この事例については本稿 3.4 節を参照されたい。

3. 周縁アラビア語における喉頭化音

喉頭化音をもち、かつアラビア語との直接の言語接触が生じた言語群としては、コーカサス諸語、現代南アラビア諸語、エチオピア＝セム語、およびその他の非セム系アフリカ諸語が挙げられる。本節ではこうした諸言語が話されている四地域(コーカサス地域、南アラビア地域、アフリカの角地域、スーダンベルト地域)をサンプルとし、データが得られる限りにおいて以下の四点の事例について検討する。

- (i) 各言語にみられるアラビア語借用語における PA. *q, *t の反映
- (ii) 各言語のアラビア文字表記 ('*ajamī*) における <ق>, <ط> の役割
- (iii) 非アラビア文字によるアラビア語転写における /q/, /t/ の転写
- (iv) 各地域により発話される非母語アラビア語変種における PA. *q, *t の反映

ただし、上記の諸事例のうち、(i) アラビア語借用語における反映は、規則性が低く、かつサンプル化による統計的处理が困難であるため、印象主義的なデータを提示するにすぎない。また、(ii)・(iii) 文字転写はかなりの程度規則的ではあるが、必ずしも音声実態が伴わない可能性があるため、直接の証拠とはできない。これに対して、(iv) アラビア語非母語話者変種における反映は、かなりの程度規則的であり音声実態が観察可能であるという点で、最も信頼のおけるデータであるが、現時点では十分な量の記述が得られない。本稿では、以上の 4 つの事例をまとめて便宜的に「周縁アラビア語」と呼ぶこととする¹⁶⁾。

3.1. コーカサス地域

コーカサス地域で話される諸言語には、固有語のみならずアラビア語借用語においても放出音が観察される。それらの事例の中には、再喉頭化、つまり基層言語の子音体系の要請に基づき借用語の音声実現が喉頭化音へと逆的に変化したと解釈しうる事例(例えばグルジア語、カルトヴェリ語族)と、再喉頭化を経たとは考えられない事例(例えばレズギ語、北東コーカサス語族)がみられる。

まず、グルジア語におけるアラビア語借用語に関しては、多くの場合 PA. *k, *t は有気無声音 /kʰ/, /tʰ/、PA. *q, *t は放出音 /qʰ/, /tʰ/ として反映する(例: t'abag'i「木皿」(CA. ṭabaq)、ekʰimi「医者」(CA. ḥakīm)、tʰariyi「日付」(CA. tāriḳ))¹⁷⁾。つまり、表層的にはこれらの反映は先述の喉頭化音をもつアラビア語諸方言と同様であるといえる。しかし、この事例は PA. *q, *t が放出音であった直接的証拠とはならない。なぜなら、基層言語の影響として説明可能であるためである。

グルジア語は有声音・有気無声音・放出音の対立(例: /d/-/tʰ/-/tʰ/)をもつが、無

16) いずれの場合においても、アラビア語子音の反映には多かれ少なかれ例外(あるいは多様性)がみられる。議論の簡素化のため、本稿では最も一般的な反映のみに焦点を当てることとし、基本的には不規則な反映に関しては議論しない。

17) グルジア語のデータは Cherkesi (1950) に基づく。

気無声音をもたず、ギリシャ語借用語では有気無声音・無気無声音の対立が有気無声音・放出音の対立として (例: Χριστός > kʰrist'e 「キリスト」、εκκλησία > ekʰlesia 「教会」、θηριακή > tʰeriaʰi 「テリアカ」)、ロシア語など近代ヨーロッパ諸語からの借用語についても、(無声) 破裂音は基本的に放出音として (例: καρτόφελ > kʰartʰopʰili 「じゃがいも」) 反映される。また、Tsereteli (1978) はジョージアで話される現代アラム語東部方言の一つが「声門化音」(その他の現代東アラム語諸方言における咽頭化無気無声音や破裂音+声門閉鎖音の連続に対応する) をもつと記述しているが、この言語事実は一般に、PS の放出音の反映としてではなく、グルジア語 (のようなタイプのコーカサス諸語) との言語接触による言語変化と分析されている (Kogan 2011: 60)¹⁸⁾。つまり、アラビア語 /k/, /t/ の (余剰的な) 有気性がグルジア語において弁別素性と解釈され、無気の /q/, /t/ に放出音を充当した結果、アラビア語借用語において再喉頭化が生じているという説明が不可能ではない。

これに対して、レズギ語のアラビア語借用語にもグルジア語とほぼ同様の反映が見られる (例: qʰatʰ 「部分」(CA. qatʰ), deqʰiqʰa 「分」(CA. daqīqa), šejtʰán 「悪魔」(CA. šayṭān), hukʰumátʰ 「政府」(CA. ḥukūma), jetʰīm 「孤児」(CA. yaṭīm)) が、この事例は再喉頭化としては分析できない。なぜなら、レズギ語破裂音には有気無声音・有気無声音・放出音 (例えば /d/-/t/-/tʰ/-/tʰ/ や /g/-/k/-/kʰ/-/kʰ/)、ただし口蓋垂音は有気無声音を欠く /q/-/qʰ/-/qʰ/) の対立がみられ、ロシア語等からの借用語においては放出音の反映はみられない (例: レズギ語 politika 「政治」) ように、PA. *q, *t がレズギ語で放出音として反映する動機は存在しない¹⁹⁾。

なお、その他の強調音に関しては、放出音 (例えば固有語に見られる /tʰ/) による反映をもたず、単純な摩擦音によって反映している (例: sábur 「我慢」(CA. šabr), zajjif 「虚弱な」(CA. ḍaʿīf), lehze 「瞬間」(CA. laḥḍa))²⁰⁾。この言語事実は、強調音の有標性を放出音の有標性によって置換しているのではないことを示している。なお、レズギ語は1928年の文字改革以前にはアラビア文字による表記が行われていたが、<ق> は /qʰ/、<ط> は /tʰ/ の表記に用いられていた (Haspelmath 1993: 443)。以上より、レズギ語と直接接した主要なアラビア語変種が放出音として実現する /q/, /t/ をもっていたと結論づけることが必要となる。

18) なお、コーカサス地域においては、コーカサス諸語やアラム語のみならず、印欧語のオセッソ語や一部の東アルメニア語・クルド語方言など、語族・語派を越えて (直接祖語に遡りえない) 放出音が分布していることから、ある種の地域特徴であると考えられる。

19) つまり、レズギ語では PA. *q, t は /q/ [qʰ], /t/ [tʰ] と反映することが期待される。ただし、PA. *q については、レズギ語で /q/ として反映する語も多数存在する (例: qelém 「ペン」(CA. qalam), qelé 「要塞」(CA. qalʿa))、これらについては別途詳細な議論が俟たれる。レズギ語における借用語のデータは Haspelmath (1993) に基づく。

20) なお、グルジア語においても同様に PA. *š, *ḍ は /s/, /z/ として反映する (例: suratʰi 「写真」(CA. šūra), zarali 「損害、傷害」(CA. ḍarar))、管見の限りグルジア語がもつ摩擦放出音 /tʰ/ による反映はみられない。

3.2. 南アラビア地域

先述の通り、セム祖語の「強調音」に対応する放出音をもつ代表的なセム諸語としては、現代南アラビア諸語 (Modern South Arabian) とエチオピア＝セム諸語が知られている。コーカサス地域で話される諸言語とは異なり、これらの言語はアラビア語と系統を一にし、かつアラビア語との長く、より緊密な接触の歴史を有する。本節ではまず現代南アラビア諸語に関わるデータを分析し、それらを「強調音」の二種の音声実現のしかた (放出音か口蓋垂音・咽頭化音か) が言語接触により相互の言語に影響しあっている事例であると結論付ける。つまり、現代南アラビア諸語に関わる事例には、前節のコーカサス地域 (特にグルジア語) の事例とはやや異なり、「再喉頭化」したと分析せざるを得ないものが存在する。

アラビア半島南部で話される現代南アラビア諸語においては「強調音」は基本的には放出音として音声実現することが知られている (例えばオマーンで話されるメフリ語、Ridouane et al. 2015)。Lonnet (2009: 299) は、現代南アラビア語と隣接して話されるアラビア語方言では「強調音」(/t, s, d, ɖ, q/) が放出音 ([t', s', l', θ', k']) のように実現することがあると述べている。実際には南アラビアに全ての「強調音」を放出音として実現するアラビア語変種の存在は報告されておらず、この記述は現時点では留保が必要である²¹⁾。しかし、少なくとも現代南アラビア語におけるアラビア語借用語では、各強調音が破裂音・摩擦音を問わず咽頭化音／口蓋垂音から放出音に体系的に置換されている (例：メフリ語 [k']ahwēt (CA. qahwa) 「コーヒー」、mæxlə[s'] (CA. muḵliṣ) 「誠実な」、[θ']ərūr (CA. ɖarūr) 「傷害」、Lonnet 2009 より)。これらの例のうち、PA. *ɖ (< PS. *ṣ) がメフリ語で [θ'] と反映している点は興味深い。なぜなら、メフリ語における PS. *ṣ の反映は /s/ [l'] であり、メフリ語 /t/ [θ'] は PS. *t に由来するため、この現象は南アラビア地域のアラビア語方言における PA. *ɖ が *ɖ に合流 (音声的には [ðʕ] として実現する) していることを抜きには説明できないためである。すなわち、この状況においては、メフリ語話者が規則的な音対応を意識することにより、基層言語の「強調音」の特徴を借用語に転移させた事例、いわば語源的音韻対応による再喉頭化の事例であると言える。

興味深い点として、これとは逆方向の影響も見られる。Lonnet (2009: 299) は、現代南アラビア諸語の一部では、アラビア語との言語接触の結果、強調音が (有声) 咽頭化音として実現する変異も観察されること、およびその傾向は現代南アラビア諸語に共通して見られる強調音のうち閉鎖音 (/k/, /t/) に比して特に摩擦音 (/s/ [s' ~ zʕ], /θ/ [θ' ~ ðʕ], /ʃ/ [l' ~ ʕʕ], /ʃ/ [j' ~ ʕʕ]) について強いことを指摘している²²⁾。これに対して、Watson & Bellem (2010) はイエメン東部で話されるメフリ語方言の強調音について、/k/ のみが常に放出音として実現し、その他の強調音 (/t, s, θ, ʕ/) は前休

21) Simeone-Senelle (2002) はイエメンのメフリ人の話すアラビア語非母語話者変種を記述しているが、強調音は放出音としては実現されないことを報告している。

22) ただし、これらの放出音のうち /ʃ/ は現代南アラビア諸語に広くみられるものの、同源語はみられないため、二次的に発展した音素であると考えられている (Kogan 2011: 108)。

止位置 (pre-pausal) 以外では放出音として実現しないこと、Gasparini (2017) はオマーンで話されるバトハーリー語の強調音について、/k/ および非母音間の /t/ のみが放出音として実現し、その他の強調音 (全て摩擦音) は咽頭化音としての実現しかもたないことを音響音声学的に明らかにしている。

この言語事実は、オマーン・ゾファール地方の現代南アラビア語話者の話すアラビア語変種では /t/, /g/ のみがそれぞれ放出音 [tʰ], [kʰ] として (かつ「/q/ が /g/ のように」) 実現すること (Davey 2016: 19) が奇妙ではないことを示唆する。まず、この変種における /t/ [tʰ] の実現は、基層言語の「強調音」の特徴が上層言語に転移した事例と考えられる。これに対し、/g/ [kʰ] という実現は、一見新たな喉頭化音の発生であるかのような印象を与える。しかし、イエメンを含むアラビア半島の一部の現代アラビア語方言において (完全に、あるいは部分的に) PA. *g, *q が合流 (merger、つまり PA. *q vs. *g [ɣ/ʁ] > /q/ [q ~ ɣ ~ ʁ]) あるいは循環推移 (circular shift、つまり PA. *q > /g/ かつ PA. *g > /q/) している²³⁾。この事実を考慮すれば、この /g/ [kʰ] という実現は子音推移 (/g/ > /q/) と基層言語からの音声的転移が同時に生じたものであると分析できる。結果的に、この /t/, /g/ の「放出音」としての反映もまた現代南アラビア語との言語接触による再喉頭化の事例と分析しても矛盾はない。

ただし、メフリ語におけるアラビア語借用語とは異なり、この事例には言語接触による再喉頭化であると断定するだけの証拠は存在しない。換言すれば、ゾファールの現代南アラビア語と接触した (古期の) アラビア語変種において、破裂音は放出音、摩擦音は咽頭化音として実現していた可能性を否定することはできず、子音推移以前の /q/ がもっていた喉頭素性が推移後に生じた二次的な /q/ (以下、/q₂/ と表記する) に継承されたものである²⁴⁾、とする分析も同等に可能である。

3.3. アフリカの角地域 (エリトリア・エチオピア)

アラビア半島の対岸で話されるエチオピア＝セム諸語 (Ethiopian Semitic、略号 ES) においても、現代南アラビア諸語とやや類似した現象がみられる。現在話される ES では基本的に「強調音」(/kʰ/, /tʰ/, /sʰ/, および二次的に発生した /ɖʰ/, /pʰ/) は全て放出音として実現するが、アラビア語と緊密に接触しているティグレ語の一部の変種では、/kʰ/ [q], /tʰ/ [tʰ], /sʰ/ [sʰ] のような変異も観察されている (Elias 2014: 233;

23) 例えば、イエメン・ヤーフィイ方言 (Vanhove 1995) では qāl ~ gāl (~ ɣāl) 「彼は言った」 (cf. CA. qāla), luḡa (~ luḡa) ~ luqa 「言語」 (cf. CA. luḡa) のような変異がみられる。同様の反映はアフリカの角地域で地域共通語として話されるアラビア語にもみられる (Simeone-Senelle 2006)。

24) 子音の連鎖推移や合流においては特定の音素の余剰的／二次的特徴が随伴的に継承されるケースがある。例えば、高地ドイツ語の第二次子音推移 (/t/ [tʰ] > /tʰ/ かつ /d/ > /t/ [tʰ]) では、推移の前後で /t/ の有気性が変化していない。また、ジュバ・アラビア語 (Nakao 2017) では、語末子音に有声性の自由交替がみられる (例: jāhiz ~ jāhis 「準備できている」、belīd ~ belīt 「馬鹿」、sūg ~ sūk 「市場」) が、固有語音素として /p/ が欠けているため、/b/ は最も素性の近い /f/ と交替する (sāab ~ sāaf 「難しい」)。つまり、/b/ ~ /f/ の交替に関しては、有声性だけでなく調音点・調音方法の異なる子音と合流していることになる。3.4 節で触れるように、PA. *g が喉頭化音として反映している類例はアフリカでも広くみられる。

Souag 2017)。中でも、ダハラク諸島で話されるダハラク語 (あるいはティグレ語ダハラク方言) では、「強調音」は (借用音素である /ɛ/ を除き)、全て「弱い咽頭化」を伴って実現すると報告されている (Simeone-Senelle 2005)。こうした強調音の咽頭化音 (口蓋垂音) としての実現は、アラビア語との強い接触が見られる地域でのみ報告されており、上層言語 (アラビア語) の基層言語 (ES) への影響と考えるのが妥当である。これと対照的に、アフリカの角地域における周縁アラビア語においても、PA. *q, *t̤ が放出音として反映している事例が見られる。

Leslau (1990) は主要な ES (ゲエズ語、ティグリニヤ語、ティグレ語、アムハラ語、アルゴッパ語、グラゲ語、ハリ語) に共通して、アラビア語借用語では PA. *q, *t̤ が放出音 (それぞれ /k'/, /t'/) として、PA. *s, *d, *ḍ はその他の非強調音と同様に非放出音 (例えばそれぞれ /s/, /d/, /z/) として反映すること、さらに前節でみた現代南アラビア語話者のアラビア語変種と同様に、PA. *g は /k'/ として反映することを明らかにしている²⁵⁾。例えば、アムハラ語では k'adi「裁判官」(CA. qāḍī), k'äyyärä「変える」(CA. ḡayyar), sult'an「首長」(CA. sulṭān), sāhan ~ sahan ~ sän「皿」(CA. ṣaḥan), nāzifa「清潔な」(CA. naḍīf) のような借用語がみられる (Leslau 1990)。アムハラ語は PA. *s と語源的に対応する /s'/ [ʰs'] をもち、固有語 (ないし古期の借用語) である s'älot「礼拝」に対して近年のアラビア語借用語 ṣālat (CA. ṣalāt) のような二重語 (doublet) に典型的に示されるように、PA. *s が /s'/ と反映していない点の特筆に値する。この状況は、前節のメフリ語におけるアラビア語借用語の事例とは異なり、コーカサス諸語と類似しているといえる²⁶⁾。

これと似た対応は、同地域のその他の周縁アラビア語の事例にもみられる²⁷⁾。

25) 現代南アラビア諸語と異なり、ES では PS の強調音の一部が合流している。例えば、アムハラ語では PS. *k̤ は放出音として他の音素との弁別が保持されているが、PS. *s̤, *t̤ は完全に、*s̤ は部分的に *t̤ と合流している。例えば、アラビア語と以下のような対応を示す: k'arab「近い」(cf. CA. qurb「近く」), wəst'「中」(cf. CA. waṣṭ'「中」), t'əfər「爪」(cf. CA. ḍufr「爪」), t'ərs「齒」(cf. CA. ḍirs「奥歯」), s'om ~ t'om「断食」(cf. CA. ṣawm)。なお、ティグリニヤ語・ティグレ語では *s̤・*s̤・*t̤ は /s'/ に合流し、*t̤ に遡る /t'/ との対立を残している。また、ES は PS. *g̤ を失っている (例: アムハラ語 mə'ərab「西」、cf. CA. maḡrib)。エチオピア諸語の音素表記およびアムハラ語データには Leslau (1976) を参照しているが、放出音に関してのみ IPA 式表記 <'> を用いる。

26) 例外的に、ゲエズ語では CA. 'aṣfar > 'as'far「黄色」、CA. ṣalīb > s'albo「十字架」(?), CA. ḡalama > t'alāmā「不正を行う」(?) のような対応もみられる (Leslau 1990, ただしこれらの一部はシリア語等からの借用である可能性もある)。また、初期のムスリムが ES (おそらくゲエズ語) からアラビア語に持ち込んだと考えられている借用語、例えば CA. muṣḥaf「書写本」(ゲエズ語 mäs'hāf) のような例では、放出音 /s'/ が咽頭化音 /s̤/ となっている。これに加え、14 世紀イエメンで編纂されたアラビア語とある種の ES の対照語彙集においては、ES. /k'/, /t'/, /s'/ がアラビア文字 <ق>, <ط>, <ص> で規則的に転写されている (Bulakh & Kogan 2017)。

27) ここで挙げる諸事例のほかにも検討すべき問題はいくつか存在する。Simeone-Senelle (2006) はアフリカの角地域 (特にエリトリア) で地域共通語として話されているアラビア語諸変種について、喉頭化音がみられないことを報告している。Serjeant (1969) は南アラビアのエチオピア系奴隷の末裔が話すアラビア語変種について短く記述しているが、喉頭化音の現れについては述べていない。2.2 節で述べた通り、アラビア語イエメン・ザビード方言では喉頭化音による反映がみられるが、ザビードがエチオピア奴隷貿易の拠点であったことを考えれば ES の基層言語としての影響を疑うことも不可能ではない。

第一の事例として、Littmann (1908) は大英博物館所蔵のティグリニャ語・トルコ語・アラビア語対照語彙集を分析している。そのエチオピア文字によるアラビア語表記では、ከታብ <k(ə)-ta-b> 「本」(CA. kitāb)、ቀረፍ <qä-si-r> 「短い」(CA. qaṣīr)、ሰከር <sä-k'i-r> 「子供 [sic]」(CA. ṣaġīr)、ጠዋል <t'ä-wi-l> 「長い」(CA. ṭawīl)、ዲፋን <di-fa-n> 「客人」(CA. dīfān)、እድህር <'a-d(ə)-hu-r> 「3時 [sic]」(CA. aḍ-ḍuhur) のように、PA. *k, *t, *s, *d, *ḍ に対応する子音は非放出音として、PA. *q, *ġ, *t に対応する子音は放出音として、規則的に転写されている²⁸⁾。これと同様のエチオピア文字によって表記された複数のアラビア語語彙集においても、全く同様の対応が観察されることが報告されている (Littmann 1908; Troupeau 1970)。

第二の事例として、エチオピアのムスリム・コミュニティには、主としてアラビア文字によって表記され、儀礼的場面において朗詠される ES によるイスラーム詩 (ajām または zikr) の伝統がみられる²⁹⁾。Drewes (2007) や Wetter (2007, 2012) などの先行研究は、この伝統で使われるムスリムのアムハラ語レジスターには、多量のアラビア語借用やアラビア語とのコードミキシングがみられることを報告している。先に述べた一般的なアムハラ語におけるアラビア語借用とは違い、このレジスターでは、話者のアラビア語習熟度に左右されるが、アムハラ語固有語にはみられない CA. /k/, /g/, /ʔ/, /h/, /t/, /d/ などの音素はそのまま借用され (または類似の音素と合流し)、CA. /s/, /d/ は後続母音に円唇化を引き起こすことがある³⁰⁾。これに対し、CA. /q/, /t/ は規則的に放出音 [kʰ], [tʰ] として実現し、特に母音の質を変化させない³¹⁾。例えば、Drewes (2007) が挙げる詩中のアラビア語挿入句の例 *al-hamdu lillāhi xala[kʰ]a l-mus[tʰ]afā* 「かの《選ばれし者》を創造された神に讃えあれ」(CA. al-ḥamdu lillāhi ḵalaqa l-muṣṭafā) や、コードミキシングの例 *ma[tʰ]ar ul-mahabba yä-zännäbbaččāw, yä-mahabba fəre y-afärra [kʰ]alb-aččāw, fī kulli aw[kʰ]āti ənək'əlfə-m yallaččāw* 「慈愛の雨が降り注いだ者、慈愛の実が心に実った者は、いかなる時も眠気に襲われない」(斜体部 CA. maṭaru l-mahabba; mahabba; qalb; fī kulli 'awqātin; 立体部はアムハラ語) におけるこれらの子音の反映を参照されたい。さらに、Wetter (2012) は、アラビア文字で表記されたこの種のテキストでは、アムハラ語 /kʰ/, /tʰ/ は <ق>, <ط> にて表記されること (例: kʰut'raččāw <فُطْرَاشَوْ> [sic] 「彼らの数」)、これに対し <ص>, <ض>, <ظ> 等はアラビア語借用語・挿入句等の語源的綴りにのみ用いられる (例: täsonnäfä <تَصَنَّفَ> 「作詩された」) ことを報告している。

28) Littmann (1908) は「ヒジャーズ方言」と同定しているが、አለማራፋል <'a-l-mä-ra-fi-l> 「ハイエナ」(スーダン方言 marfa'in) などの語彙項目に示されるように、複数の口語アラビア語方言の語彙が混在している。トルコ語部分は少数の語に限られており、無声破裂音については一例ながら የከጥር <yo-k-t(ə)-r> 「ない」(トルコ語 yoktur) がみられる。

29) アムハラ語のみならず、ハハリ語についても類似の現象が知られている (Wagner 1983)。

30) 例えば、借用語として xälläk'ä 「創造する」(CA. ḵalaqa)、sännäfä ~ sonnäfä 「作詩する」(CA. ṣannafa)、sahib ~ s'ahib 「朋友」(CA. ṣāhib)、rämādan ~ rämād'an 「ラマダーン」(CA. ramaḍān) などが報告されている (Drewes 2007; Wetter 2012)。

31) Drewes (2007: 5) は、エチオピア文字で表記されたこの種のテキストにおいて、「アラビア語 [の音連続] /ta/ が <t'o> と表記される」例があると述べているが、具体例は挙げられてない。

以上で述べた PA. *q, *t̤ のアフリカの角地域での /k'/, /t'/ としての反映について、一部の先行研究 (Leslau 1990; Wetter 2007: 53) は現代南アラビア諸語におけるアラビア語借用と同様に、語源的対応による再喉頭化の事例であると考えてきたようである。しかし、これらの研究は PA. *s, *d, *ḏ が語源的に対応する放出音 (つまり /s'/ または /t'/) で反映しないことについては無視、あるいはアドホックな説明 (クシ語経由での借用を想定するなど) をしてきたにすぎない。実際には、先述のとおり以上の二つの事例は南アラビア地域というよりもコーカサス地域 (特にグルジア語) の状況と類似しているが、これらの言語事実は再喉頭化の強い証左といえるだろうか。

まず、この議論にはヨーロッパ諸語からの借用語の分析が必要である。ES には宗教語彙を中心に (ゲズ語経由の) ギリシャ語借用語がみられるが、グルジア語同様、ギリシャ語の無気無声破裂音は放出音として反映している (例: τράπεζα > t'äräp'p'eza 「テーブル」、πεντηκοστή > p'änt'äk'ost'e 「ペンテコステ」)³²⁾。これらの事例からは、アフリカの角地域における PA. *q, *t̤ の放出音としての反映は、グルジア語と同様に、ターゲットの無声無気破裂音が基層言語の音素体系に合わせて再解釈された結果、再喉頭化したものである可能性が指摘できる。これに対して、近代以降の有気性を弁別しない西欧諸語から借用された語彙では破裂音は基本的に非放出音として借用されており (例: イタリア語 politica > polätika 「政治」、英語 biscuit > bəskut 「ビスケット」)、これらがギリシャ語借用語と統一的に説明可能かどうかは疑問が残る。アムハラ語などの ES では非放出破裂音は有気音として実現することが知られるが (Leslau 1997)³³⁾、伝統的な ES 音韻論研究ではこの有気性は弁別の特徴とは分析されてこなかったように (cf. Dolgopolsky 1977)、はたして ES にアラビア語 /q/, /t/ やギリシャ語無気音を放出音として借用する積極的動機があったか否かについては、現時点では結論を導くことはできない。このように、上記の言語事実の解釈には議論の余地が残されており、これらは 3.2 節のメフリ語におけるアラビア語借用語の事例とは異なり、積極的に再喉頭化が生じた可能性を示していると結論付けることはできない。

しかし、アフリカの角地域における周縁的アラビア語の第三の事例として、再喉頭化が実際に観察されたとする報告が存在していることは特筆に値する。エリトリア内戦期に多数のエリトリア移民・難民がスーダンに移動した結果、アラビア語スーダン方言を第二言語として獲得する世代 (ティグリニャ語話者) が発生した。Fre Woldu (1986) は彼らの話す第二言語としてのアラビア語スーダン方言の子音音素に関して音響・聴覚音声学的調査を行い、咽頭化音 /s/, /d/, /z/ (PA. *ḏ に対応) が非強調音 [s], [d], [z] として、咽頭化音 /t/ は放出音 [t'] として実現することを明らかにした。アラビア語スーダン方言では /t/ は [+cg] 素性をもっていないため (Fre

32) PS. *p は ES では /f/ として反映しており、/p/, /p'/ はいずれも借用音素である。

33) 岩月真也氏 (2018年1月28日私信) によると、後続母音による程度差はみられるものの、ティグリニャ語も同様の実現をもっている。

Woldu 1986)、ティグリニヤ語母語話者は何らかの理由で再喉頭化を生じさせたことになる。しかし、この報告はアラビア語スーダン方言母語話者のデータを十分に扱っていないため、現時点では若干の疑念が残ると判断せざるを得ない³⁴⁾。実際、次節で述べるように、スーダンベルトでは、PA. *q, *t の直接的・間接的な反映として喉頭化音が広く観察される。

3.4. スーダンベルト地域

最後に、ES 以外のサブサハラ＝アフリカ地域で話される多くの言語においても、喉頭化音は広く分布している。中でも直接アラビア語との言語接触が生じた地域としては、大きくアフリカ東部とスーダンベルト地域が指摘できる。管見の限り、アフリカの角地域を除くアフリカ東部（例えば南スーダン・ウガンダ・ケニアのアラビア語クレオールやスワヒリ語などのバントゥ諸語におけるアラビア語借用語）では PA. *q, *t の喉頭化音による反映はみられないが、スーダンベルト地域には複数の興味深い事例がみられる。

2.2 節で述べた通り、中部アフリカ（ナイジェリア北東部・カメルーン北部・チャド）に分布している一部の現代アラビア語諸方言では PA. *t が入破音 [d]（あるいは無声 [d̥]）として、かつ PA. *ḡ がチャド南部・カメルーン北部の一部のアラビア語方言では入破音 [g]、ナイジェリアの諸方言では非喉頭化音 [q]³⁵⁾ として反映していることが、数々の先行研究（Zeltner & Fournier 1971; Hagège 1973; Décobert 1985; Zeltner & Tourneux 1986; Owens 1993）によって報告されてきた（例：チャド南西・ナラ方言 [g]anam 「羊」（CA. ḡanam), ma[d]ara 「雨」（CA. maṭara）³⁶⁾）。

中部アフリカのアラビア語方言の歴史言語学的位置づけを論じた Owens (1993) は、これらの喉頭化音としての反映を 15 世紀前後のチャド・バーギルミー地方におけるフルフルデ語（ニジェール＝コンゴ語族大西洋語派）とアラビア語の言語接

34) 管見ではアラビア語スーダン方言に関する限り、/t/ が喉頭化音であるとする報告は存在しない。ただし、Burton (1934: 4) はスーダン方言における /t/ について、“Has a popping sound like the opening of a soda-water bottle” と述べている（Fre Woldu 1986 においても言及されている）。これが [+cg] 素性を表現しているとすれば、スーダン方言における /t/ の音声実現には少なくとも通時的変化あるいは個人差を想定できる。

35) 例：CA. ḡanam vs. ナイジェリア方言 qanam 「羊」（Owens 1993: 94）。アラビア語遊牧民方言では一般に PA. *q が規則的に /g/ [g] として反映される（例：ḡāl 「彼は言った」（CA. qāla））が、北メソポタミア・アルジェリア・モーリタニア・ナイジェリアなどの一部の遊牧民方言ではこれと並行して PA. *ḡ が規則的に /q/ [q] として反映される（Cantineau 1960: 72; Cohen 1963: 35–37; Fischer & Jastrow 1980: 143）。PS. *g が CA や遊牧民方言で硬口蓋音 /j/ として反映していることを踏まえると、歴史的には ḡ > q > g > j のように引き連鎖（drag chain）型の子音推移が生じたといえる。

36) ナラ方言のデータは Hagège (1973) による。カメルーン北部・チャド南部のアラビア語方言を扱った Zeltner & Fournier (1971) および Zeltner & Tourneux (1986) は、PA. *t, *ḡ の [d̥], [d] としての反映に加え、PA. *d の [d] という反映についても記述している。PA. *d が喉頭化音として反映する例は周縁アラビア語においてもこの例がほぼ唯一であり、興味深いデータではあるが、Owens (1993) が指摘している通り、これらの対応は実際には不完全であり、現時点ではデータの信憑性を検証することができないため、本稿では議論の対象から除外する。

触による音変化 (PA. *t > d || PA. *ḡ (> q) > ḡ) として解釈している³⁷⁾。実際に、Abu-Manga (1986) はフルフルデ語 (ナイジェリア・ゴンベ方言) におけるアラビア語借用語では、PA. *t が [d], PA. *q が [ḡ] (または [k]) として反映する傾向 (例: CA. ḥaqīqa > haḡīḡa 「真実」、CA. lūtu > luudu 「ロト」)、またスーダンのフルフルデ語ではアラビア語スーダン方言からの借用語において /ḡ/ (CA. /ḡ/ および一部の /q/ に対応) が /ḡ/ で反映する傾向 (例: CA. = スーダン方言 raḡīf > raḡīif 「パン」、CA. qānūn / スーダン方言 ḡānūn > ḡānuun 「法律」)³⁸⁾ があることを指摘している。また、Eguchi (1975) はカメルーン北部のフルフルデ語話者の古典アラビア語の「音読」において <ق> が [ʔg]、<ط> が /d/ (恐らく音声実現は [ʔd])³⁹⁾ としての音声実現をもつことを記録している。さらに、フルフルデ語のアラビア文字表記では /d/ が一般的に <ط> と表記されることも知られている (Robinson 1982)。

しかしながら、Owens (1993) のフルフルデ語基層説には様々な角度から批判が可能である。中でも本稿に関する限り最も重要な点として、スーダンベルトのアラビア語方言が入破音をもつこと自体はある程度説明されたとしても、なぜこれらが (フルフルデ語の借用語についてではなく) PA. *q, *t の反映にみられるのかという問題が残されている。加えて言えば、上記のようなフルフルデ語話者のアラビア語音読における CA. /q/ [ʔg] やフルフルデ語やアラビア語借用語にみられる /ḡ/ は固有語には現れない借用音素であり (Eguchi 1975; Abu-Manga 1986)、フルフルデ語のアラビア語借用語・アラビア文字表記ではその他の強調音 PA. *s, *d, *ḡ については、こうした特殊な反映はみられない。このことを考慮すれば、むしろ中部アフリカのアラビア語諸方言におけるこれらの入破音の存在は、3.1 節でみたレズギ語の事例と同様に、PA. *q, *t を喉頭化音 (かつ PA. *s, *d, *ḡ を非喉頭化音) として再建する有力な根拠となりうる反映であると分析できる⁴⁰⁾。

この解釈は、少なくとも以下の三つの事例からも支持される。

第一に、フルフルデ語と同様にスーダンベルトで広く話されるハウサ語 (アフロアジア語族チャド語派) においても、アラビア語借用語において PA. *q が k [kʼ]、PA. *t が ts [sʼ] あるいは方言によっては d [ʔd] のように放出音 (あるいは前声門

37) Owens (1993) はこれらの入破音をもつアラビア語諸方言を「バーギルミー・アラビア語」と呼んでいるが、バーギルミー王国やバーギルミー語 (ナイル=サハラ語族中央スーダン語派) とは関係ないことから、ミスリーディングな名称である。チャド・バーギルミー地方の複数のアラビア語変種を扱った Décobert (1985) は、過去に生じたベラク語 (ナイル・サハラ語族中央スーダン語派) からアラビア語 (ババリア方言) への言語移行に注目し、ベラク語を基層言語とする言語接触により、これらの入破音が存在することを説明している。しかし、この説明はその他の中部アフリカの (ベラク語を基層言語としない) アラビア語諸方言における入破音としての反映を説明できない。

38) 以上のフルフルデ語データ・表記法は Abu-Manga (1986) による。なお、Fre Woldu (1986) によればアラビア語スーダン方言では、話者によっては /ḡ/ が [q] と実現することがある。つまり、スーダン・フルフルデ語の /ḡ/ は二次的に発生した /q/ の反映と考えることもできる。

39) フルフルデ語の入破音は方言により前声門化音として実現する (塩田勝彦氏、私信)。

40) 本稿 3.2 節末尾で行った議論により、この /ḡ/ は通時的な子音の連鎖推移により、PA. *q の音声特徴を継承したと考えることが可能である。

化音) として反映する例がみられ (例: miskaalii 「ミスカーリ (香料の単位)」 (CA. miṭqāl), tsibbu ~ tsubbu ~ ḏibbu 「呪術」 (CA. ṭibb))⁴¹⁾、ハウサ語のアラビア文字表記において *k* が <ق>、*ts* が <ط> と表記される。これに対し、PA. *ṣ, *ḏ, *ḏ についてはこれらと並行的な喉頭化音による反映はみられない (Abu-Manga 1999; Rattray 1913)。つまり、ハウサ語とフルフルデ語ではそれぞれが PA. *q, *ṭ を異なる種類の喉頭化音 (あるいは声門化音) として反映していることから、ほぼ同じ地域で、並行的な言語現象が、異なるプロセスにより生じたと考えるのが妥当である。

第二に、Schroepfer (2015) はエジプト・アスワン都市部のアラブ人 (Sa'īdī) の話すアラビア語方言において PA. *ṭ が無声入破音 [ḏ] として反映していること、かつこの音声実現は話者の「アラビア半島出自を示す象徴的な音声実現」と認識されていることを報告している。Owens (1993) によって指摘されているように、エジプト南部 (および中部オアシス) の諸方言とスーダンベルトで話される諸方言には様々な共通特徴 (改新を含む) がみられるため、これらの諸方言は単一の祖方言から分岐したと考えられる。この場合、PA. *ṭ の喉頭化音としての反映はこの祖方言に再建されるが、仮に PA. *ṭ が非喉頭化音であったとするならば、言語接触を経ない再喉頭化 (PS. *ṭ [+cg] > PA. *ṭ [-cg] > 祖スーダン方言 *ṭ [+cg])、ないし古い時期におけるアスワン方言 (ないし祖スーダン方言) と放出音をもつ何らかの基層言語との接触の想定が必要となる。しかし、いずれの想定も現時点では傍証は皆無である。

第三に、スーダン南西部・青ナイル州やエチオピア西部・ベニシヤングル＝グムズ州で地域共通語として話されるアラビア語諸変種においても、中部スーダンのアラビア語諸方言と並行的に、PA. *ḡ, *ṭ がそれぞれ放出音 [k'], [t'] として反映している⁴²⁾。スーダン・青ナイル州で話されるウドゥック語ヤブス方言 (ナイル＝サハラ語族東スーダン語派) の破裂音には、喉頭素性に関して有声音・無声無気音・無声有気音・放出音 (・入破音) の対立 (例: /g/-/k/-/kʰ/-/k'/, /d/-/t/-/tʰ/-/t'/-/d/) がみられ (Killian 2015: 305–306)、エチオピア西部で話されるベルタ語 (ナイル＝サハラ語族、おそらく東スーダン語派) の破裂音には非喉頭化音・放出音 (・入破音) の対立 (例: /g/ [g ~ k] -/k'/, /d/ [d ~ t] -/t'/-/d/) がみられる (Neudorf 2016)。ウドゥック語ヤブス方言話者の話すアラビア語変種では、PA. *d, *t, *ṭ は [d], [t], [t'] (例: [d]īn 「宗教」 (CA. dīn), [t]īn 「イチジク」 (CA. tīn), [t']īn 「粘土・泥濘」 (CA. ṭīn)), PA. *q, *k,

41) ハウサ語データおよび表記 (ハウサ語正書法に準ずる) は Abu-Manga (1999) に基づく。さらに興味深いことに、Greenberg (1941) はハウサ語の変種によっては PA. *ṭ の反映としての借用音素としてのみ現れる [t'] が存在すること、Greenberg (1947) は PA. *q の反映としての *k* [k'] の現れを教養の高さの指標として記述している。

42) これらのアラビア語変種は、筆者が科学研究費基盤研究 (B) 「少数言語のドキュメンテーションと、エチオピア諸言語のダイナミズムに関する調査研究」 (研究代表者: 乾秀行、2014–2017年度) による支援を受けて2017年9月にエチオピア西部・アソサで行ったフィールドワークによって発見された。詳細については現時点では仲尾 (2017) を参考されたい。なお、これら両変種は文法構造の側面からも大きく異なっており、単に同じ変種の「民族方言」 (ethnolect) とは考えられない。ベルタ語話者の変種は部分的な簡略化・再分析が観察されるが、共時的にはピジンとして記述するのは妥当でない。これに対して、ウドゥック人の話すアラビア語変種は、いわゆる初期ピジン (incipient pidgin) の段階にある可能性がある。

*ġ は (PA. *q からスーダン方言 /g/ への変化を経由しつつ) [g], [k], [k'] として (例: [g]āl「彼は言った」(CA. qāla), [k]ān「彼は～であった」(CA. kāna), [k']āli「高価だ」(CA. ġālī)) 反映している。これに対し、ベルタ語話者の話すアラビア語変種では、PA. *d, *t, *ṭ はそれぞれ [d], [d], [t'] (例: [d]īn「宗教・イチジク」、[t']īn「粘土・泥濘」)、PA. *q, *k, *ġ はそれぞれ [g ~ k], [g ~ k], [k'] (例: [g]āl ~ [k]āl「彼は言った」、[g]ān ~ [k]ān「彼は～であった」、[k']āli「高価だ」) として反映している (仲尾2017)⁴³⁾。なお、ウドゥック語ヤブス方言とベルタ語はいずれも入破音 /d/ と放出音 /s'/ をもっているが、いずれの話者が話すアラビア語変種においても PA. *š, *ḍ, *ḍ はそれぞれ非喉頭化音 [s], [d], [d] として反映し、/s'/, /d/ は現れない (例: sūf「毛髪」(CA. šūf「羊毛」)、darab「彼は殴った」(CA. ḍaraba)、adum「骨」(CA. 'aḍm)、両変種とも全く同じ形式)。これら地域共通語変種に加え、ベルタ語話者による標準アラビア語の発話やクルアーン朗読においては、PA. *q, *ṭ はやはり放出音 [k'], [t']、PA. *š, *ḍ, *ḍ は咽頭化音 [sʰ], [dʰ], [zʰ] として実現する (例: qalb [k'ʰlib]「心」、ḍurūf [zʰuru:f]「状況」、dābiṭ [dʰa:bit']「オフィサー」)。

つまり、これら二つのアラビア語非母語話者変種における PA. *q, *ṭ の反映は、3.1 節のグルジア語の事例において示したように [-sg] 素性が基層言語の音韻体系に合わせて再解釈されたことにより再喉頭化が生じたと考えると矛盾が生じるという点で、レズギ語の事例と類似しているといえる。

以上より、スーダンベルト (中部アフリカおよびスーダン＝エチオピア国境) やエジプト南部で観察される喉頭化音は、遅くともこれらのアラビア語諸方言の祖方言に喉頭化音としての *q₂ (< PA. *ġ) および *ṭ を再建することの根拠と分析できる。さらに、2.2 節で述べた通り、エジプト中部オアシスやシナイ半島北部など、アラビア半島からスーダンベルト地帯へとアラビア語が拡大した経路においても PA. *q, *ṭ の声門化音としての反映が存在することは、拡大期直前のアラビア語、つまり PA への同様の再建を支持する証拠と解釈することができる。

4. 結論

本稿では、放出音として再建されている PS の「強調音」の PA における反映について検討することを目的とし、PA. *q, *ṭ が喉頭化音 (放出音・入破音) として反映している周縁アラビア語の事例を収集し、その歴史言語学的価値について論じてきた。この結果、アラビア語諸変種やその他のセム諸語における「強調音」には、表3 (網掛け部分は喉頭化／声門化音) のような対応がみられることを示した。

43) ベルタ語におけるアラビア語借用語においても同様の反映がみられる (例: k'ālat'「間違い」(CA. = スーダン方言 ġalat))。現時点では、ウドゥック語におけるアラビア語借用語については調査が行われていない。

表3. セム諸語における強調音の反映 (祖語以外は IPA 表記)

*k	*t	*t̤	*š	*s	セム祖語 (PS)
k'	t'	t'	t'	t'/s'	アムハラ語
k'	t ^{(ʔ)ʕ}	ð ^ʕ	l ^ʕ	s ^ʕ	バトハーリー語
q ^ʕ	t ^ʕ	s ^ʕ	s ^ʕ	s ^ʕ	現代アラム語東部方言 (Odisho 1988)
q ^ʕ	t ^ʕ	ð ^ʕ	d ^ʕ	s ^ʕ	現代標準アラビア語
g	t ^ʕ	d ^ʕ	d ^ʕ	s ^ʕ	アラビア語スーダン方言
ʔ	t ^ʕ	d ^ʕ	d ^ʕ	s ^ʕ	アラビア語カイロ方言
g	d ^ʕ	d ^ʕ	d ^ʕ	s ^ʕ	アラビア語ナイジェリア方言
g/q ^ʔ	t ^ʕ	d ^ʕ	d ^ʕ	s ^ʕ	アラビア語ハルガ方言
k'	t'	ð ^ʕ	ð ^ʕ	s ^ʕ	アラビア語ザビード方言
k'	t'	z ^ʕ	d ^ʕ	s ^ʕ	ベルタ・古典アラビア語
ʔg	ʔd	z	b	s	フルフルデ・古典アラビア語音読
q'/q	t'	z	z	s	アラビア語借用語 (レズギ語)
q'	t'	z	z	s	アラビア語借用語 (グルジア語)
k'	t'	z	d	s	アラビア語借用語 (アムハラ語)
k'/k	s'/d	z	l	s	アラビア語借用語 (ハウサ語)
g/k	d ^ʕ	z/ɟ	l	s	アラビア語借用語 (フルフルデ語)

これに加えて、3.2 節以降では PA. *g から子音推移を経て二次的な /q/ (/q₂/) が発生している現代アラビア語諸方言が存在することを指摘した上で、表 4 (網掛け部分は喉頭化音) のように PA. *g が喉頭化音として反映している周縁アラビア語の事例についてもこの議論の重要な傍証となることを示した。

表4. 周縁アラビア語における PA. *q, *g, 咽頭化音の反映 (PA 以外は IPA 表記)

q	ḡ	t̤	ḏ	d	s	アラビア祖語 (PA.)
g	ḡ	d̤	d̤	d̤	s̤	アラビア語ナラ方言 (チャド)
g	k'	t'	d	d	s	ベルタ・非母語アラビア語変種
g	k'	t'	d	d	s	ウドゥック・非母語アラビア語変種
ɣ	k'	t'	ð ^(ʔ)	ð ^(ʔ)	s ^(ʔ)	ゾファール・非母語アラビア語変種
k'	k'	t'	z	d	s	アラビア語借用語 (アムハラ語)
g	k'	t'	d	d	s	アラビア語借用語 (ベルタ語)

また、これらのデータから、周縁アラビア語における PA. *q, *g, *t̤ の喉頭化音としての反映は以下の三パターンの事例に帰することができることを議論した。

(i) 再喉頭化が生じうることを積極的に証明する事例。メフリ語 (などの現代南アラビア諸語) におけるアラビア語借用語では、子音の歴史的対応に基づき、アラビ

ア語強調音が基層言語での強調音の実現と同様に全て放出音として反映している。また、エリトリア難民 (ティグリニャ語母語話者) の話すアラビア語スーダン方言においては再喉頭化が実際に観察されていることが主張されている。

(ii) 再喉頭化による説明が不可能な事例。レズギ語におけるアラビア語借用語やスーダンベルト地域の諸事例については、例えば PA. *q, *t を非喉頭化無声無気音 (例えば [q^h], [t^h]) として再建した上で再喉頭化 (PS *k [k'] > PA. *q [q^h] > [k']/[q']) を想定することは、言語学的な動機付けが説明できないため極めて不自然となる。これらの事例の説明には、PA. *q, *t を喉頭化音 (可能性としては放出音 [k'], [t']) あるいは [q'], [t'] として再建する必要がある⁴⁴⁾。

(iii) 再喉頭化による説明と PA. *q, *t を喉頭化音として再建するという説明も可能な事例。グルジア語におけるアラビア語借用語、現代南アラビア語話者の話すアラビア語非母語変種、アフリカの角地域の周縁アラビア語などの諸事例に関しては、PA. *q, *t を非喉頭化無声無気音として再建し、基層言語の音素体系の要請により再喉頭化が生じたと説明することができる。しかし、同時に PA の両子音を喉頭化音として再建し、それが保持されていると説明することもできる。

以上の結論として、再喉頭化という言語現象は実在するが、周縁アラビア語における PA. *q, *t の喉頭化音としての反映をすべて再喉頭化として説明することはできない。つまり、結果的には (ii) の諸事例から PA. *q, *t は喉頭化音として、一方で PA. *s, *d, *ḏ は非喉頭化音として再建される。

この再建は (iii) の事例の多くを再喉頭化を想定せずに (ii) の事例と統一的に説明することができ、かつ再喉頭化という現象を想定することや、2.2 節で述べたような現代標準アラビア語などのアラビア語諸変種における /q/, /t/ の [-sg] としての実現や、シーバワイヒによる紀元 8 世紀のアラビア語に関するこれらの子音の記述とも共存しうる。

5. おわりに一セム祖語の強調音の新解釈への展望

これに加えて、以上のデータからは、表 3・4 で示されているように、自然類をなしていると考えられてきたセム祖語由来の「強調音」が、周縁アラビア語や一部の現代南アラビア諸語 (3.2 節参照) において必ずしも均質な音声実現によって特徴づけられていない (例えば一部は喉頭化音、一部は咽頭化音) という点が指摘できる (cf. Watson & Bellem 2010; Gasparini 2017)。

比較言語学的再建から類推変化を排除することを目的として Hetzron (1976) によって提示された「古期異祖性の原理」(principle of archaic heterogeneity) は、言語学

44) ここでの議論と同様に、ビルン語 (アフロアジア語族クシ語派アガウ語群) にみられる放出音についてはアガウ祖語 *q からの (エチオピア=セム諸語との言語接触による)「再放出音化」(クシ祖語 *k' > アガウ祖語 *q > ビルン語 k') の結果であるとする説明が行われてきたが、Fallon (2009) は本稿の議論と同様に、こうした再建は「オッカムの剃刀」(Occam's razor) の原理により棄却されるとし、アガウ祖語に *k' を再建している。

的動機が明らかでない限り、祖体系には必要なだけ多様な形式を再建することを要請する。これにより、例えばセム諸語の接尾型動詞活用 (1 人称単数／2 人称単数男性／2 人称単数女性) に関して、アラビア語 -tu/-ta/-ti、ゲエズ語 -ku/-kä/-ki、アッカド語 -(ā)ku/-(ā)ta/-(ā)ti からは、セム祖語の体系としては *ku/*ta/*ti が再建される (Hetzron 1976)。

放出音には口腔内での閉鎖が伴う (つまり破裂音／破擦音である) 傾向は通言語的にみられる (Watson & Bellem 2010: 352; Ridouane et al. 2015)。しかし、摩擦放出音がティグリニャ語やメフリ語オマーン方言のように破擦音化するか (Ridouane et al. 2015)、アムハラ語 (表 3 参照) のように破裂音化するという共時的／通時的傾向は知られているが、管見の限り摩擦音 (ないし破擦音) に限って放出音から咽頭化を伴いつつ脱喉頭化が生じたと仮定しうる事例は、現代南アラビア諸語や周縁アラビア語以外には、セム諸語に限らず皆無である⁴⁵⁾。すなわち、こうした言語変化は現時点では十分に言語学的動機が明らかであるとはいえない。本稿では十分に論証することはできないが、仮に古期異祖性の原理をセム諸語の「強調音」に適用すれば、PS に本稿が PA に再建したのと同様の体系 (例えば *k [k'], *t [t'], *ʔ [θ], *š [ʃ], *s [s']) を再建し、ES や一部の現代南アラビア諸語では音韻体系の平準化により須らく「強調音」は放出音となった、と説明することも不可能ではない。

本稿 1 節で述べたとおり、PS. *š の側面音としての再建を支持する観察可能な証拠は、ほぼ現代南アラビア諸語と周縁アラビア語における反映に限られている。本稿で扱ったような周縁アラビア語にみられる喉頭化音もまた、PS の音韻体系を少なくとも音声学的なレベルで再考するための貴重な手がかりだといえる。

[参考文献]

- Abu-Manga, A. (1986) *Fulfulde in the Sudan: Process of Adaptation to Arabic*. Berlin: Dietrich Reimer.
- (1999) *Hausa in the Sudan: Process of Adaptation to Arabic*. Cologne: Rüdiger Köppe.
- Al-Ani, S. (1970) *Arabic Phonology: An Acoustical and Physiological Investigation*. The Hague: Mouton and Co.
- Al-Jallad, A. (2014) “Aš-Šādu llatī kas-Sīn: Evidence for an Affricated Šād in Sibawayh?” *Folia Orientalia* 51, pp. 51 – 57.
- (2015) “On the Voiceless Reflex of *š and *t in pre-Hilalian Maghrebic Arabic.” *Zeitschrift für arabische Linguistik* 62, pp. 88 – 95.
- (2017a) “Graeco-Arabica I: The Southern Levant.” *Arabic in Context: Celebrating 400 years of Arabic at Leiden University*, ed. by A. Al-Jallad, 99 – 186. Leiden: Brill.
- (2017b) “The Arabic of the Islamic Conquests: Notes on Phonology and Morphology Based on the Greek Transcriptions from the First Islamic Century.” *Bulletin of SOAS* 80 (3), pp. 419 – 439.

45) 興味深い事例として、エチオピアのベルタ語マユ方言の /k'/, /t'/, /d'/, /s'/, /p'/ は、スーダンで話されるベルタ語方言 (Andersen 1993) で [q], [t'], [d], [s'], [β] として音声実現する各音素と対応している。つまり、この事例では (アラビア語スーダン方言との接触により) /k'/, /t'/ のみが脱喉頭化したと言えそうである。

- Al-Nassir, A. A. (1993) *Sibawayh the Phonologist: A Critical Study of the Phonetic and Phonological Theory of Sibawayh as Presented in his Treatise Al-Kitab*. London/New York: Kegan Paul International.
- Andersen, T. (1993) "Aspects of Berta Phonology." *Afrika und Übersee* 76, pp. 41 – 80.
- Behnstedt, P. & M. Woidich (1985) *Die ägyptisch-arabischen Dialekte*. 2 vols. Wiesbaden: Dr. Ludwig Reichert Verlag.
- Blanc, H. (1967) "The 'Sonorous' vs. 'Muffled' Distinction in Old Arabic Phonology." *To Honor Roman Jakobson: Essays on the Occasion of His Seventieth Birthday*. Vol. I, ed. by , 295 – 390. The Hague: Mouton.
- (1969) "The Fronting of Semitic G and the Qāl-Gāl Dialect Split in Arabic." *Proceedings of the International Conference on Semitic Studies Held in Jerusalem, 19 – 23 July 1965*, 7 – 37. Jerusalem: Israel Academy of Sciences and Humanities.
- Bulakh, M. & L. Kogan (2017) *The Arabic-Ethiopic Glossary by al-Malik al-Aḡḡal: An Annotated Edition with a Linguistic Introduction and a Lexical Index*. Leiden: Brill.
- Burton, G. S. M. (1934) *Sudan Arabic Note-Book*. London: McCorquodale & Co.
- Cantineau, J. (1960) *Études de linguistique arabe: Mémorial Jean Cantineau*. Paris: Klincksieck.
- Cherkesi, E. (1950) *Georgian-English Dictionary*. Oxford: Oxford University Press.
- Cohen, D. (1963) *Le dialecte arabe Ḥassānīya de Mauritanie*. Paris: Klincksieck.
- Cowan, J. M. (ed.) (1979) *A Dictionary of Modern Written Arabic*. Fourth edition. Ithaca: Spoken Language Services.
- Davey, R. (2016) *Coastal Dhofari Arabic: A Sketch Grammar*. Leiden: Brill.
- Décobert, C. (1985) *Phonologies arabes du Tchad*. Paris: Paul Geuthner.
- de Jong, R. (2000) *A Grammar of the Bedouin Dialects of the Northern Sinai Littoral: Bridging the Linguistic Gap Between the Eastern and Western Arab World*. Leiden: Brill.
- Dolgopolsky, A. B. (1977) "Emphatic Consonants in Semitic." *Israel Oriental Studies* 7, pp. 1 – 13.
- Drewes, A. J. (2007) "Amharic as a Language of Islam." *Bulletin of SOAS* 70, pp. 1 – 62.
- Eguchi, P. K. (1975) "Notes on the Arabic-Fulfulde Translational Reading in Northern Cameroun." *Kyoto University African Studies* 9, pp. 177 – 250.
- Elias, D. (2014) *The Tigre Language of Ginda', Eritrea: Short Grammar and Texts*. Leiden: Brill.
- Fallon, P. D. (2009) "The Velar Ejective in Proto-Agaw." *Selected Proceedings of the 39th Annual Conference on African Linguistics*, ed. by A. Ojo & L. Moshi, 10 – 22. Somerville, MA: Cascadilla Proceedings Project.
- Fischer, W. & O. Jastrow (1980) *Handbuch der arabischen Dialekte*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Fre Woldu, K. (1986) "Evidence of Auditory Similarity between Tigrinya Ejective /t/ and Arabic Emphatic /t/." *Orientalia Suecana* XXXIII – XXXV, pp. 123 – 138.
- Gasparini, F. (2017) "Phonetics of Emphatics in Baḡhari." *Linguistic Studies in the Arabian Gulf*, ed. by S. Bettega & F. Gasparini, 69 – 85. Turin: Università di Torino.
- Greenberg, J. H. (1941) "Some Problems in Hausa Phonology." *Language* 17, pp. 316 – 323.
- (1947) "Arabic Loan-Words in Hausa." *Word* 3, pp. 85 – 97.
- Hagège, C. (1973) *Profil d'un parler arabe du Tchad*. Paris: Paul Geuthner.
- Haspelmath, M. (1993) *A Grammar of Lezgian*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Heath, J. (1997) "Morrocan Arabic Phonology." *Phonologies of Asia and Africa: Including the Caucasus*, ed. by A. S. Kaye, 205 – 218. Winona Lake, Indiana: Eisenbrauns.
- Heselwood, B. & R. Maghrabi (2015) "An Instrumental-Phonetic Justification for Sībawayh's Classification of Ṭā', Qāf and Hamza as Majhūr Consonants." *Journal of Semitic Studies* LX, pp. 131 – 175.
- Hetzron, R. (1976) "Two Principles of Genetic Reconstruction." *Lingua* 38, pp. 89 – 108.
- Huehnergard, J. (2017) "Arabic in Its Semitic Context." *Arabic in Context: Celebrating 400 years*

- of Arabic at Leiden University, ed. by A. Al-Jallad, pp. 3 – 34. Leiden: Brill.
- Isserlin, B. S. J. (1969) “The Nessana Papyri: The Greek Transcriptions of Arabic.” *The Annals of Leeds University* 7, pp. 17 – 31.
- Khalafallah, A. (1969) *A Descriptive Grammar of Sg̣ei:di Colloquial Arabic*. The Hague: Mouton.
- Khattab, G., F. Al-Tamimi & B. Heselwood (2006) “Acoustic and Auditory Differences in the /t/-/t̤/ Opposition in Male and Female Speakers of Jordanian Arabic.” *Perspectives on Arabic Linguistics XVI: Papers from the Sixteenth Annual Symposium on Arabic Linguistics, Cambridge, March 2002*, ed by S. Boudelaa, 131 – 160. Amsterdam: John Benjamins.
- Killian, D. (2015) *Topics in Uduk Phonology and Morphosyntax*. Doctoral thesis, University of Helsinki.
- Kogan, L. (2011) “Proto-Semitic Phonetics and Phonology.” *The Semitic Languages: An International Handbook*, ed. by S. Weninger, G. Khan, M. Streck & J. Watson, 54 – 151. Boston/Berlin: Mouton de Gruyter.
- Leslau, W. (1976) *Concise Amharic Dictionary*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- (1990) *Arabic Loanwords in Ethiopian Semitic*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- (1997) “Amharic phonology.” *Phonologies of Asia and Africa: Including the Caucasus*, ed. by A. S. Kaye, 399 – 430. Winona Lake, Indiana: Eisenbrauns.
- Littmann, E. (1908) “Abessinische Glossen.” *Zeitschrift für Assyriologie* XXI, pp. 50 – 109.
- Lonnet, A. (2009) “South Arabian, Modern.” *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics*. Vol. 4, ed. by K. Versteegh et al., 297 – 300. Leiden: Brill.
- Marçais, W. (1906) “Le dialecte arabe des Ūlād Brāhīm de Saïda (département d’Oran).” *Mémoires de la Société Linguistique de Paris* 14, pp. 97 – 164, 416 – 472, 481 – 500.
- Naïm, S. (1999) “Dépalatalisation et construction des parlers urbains en arabe palestinien.” *La Linguistique* 35 (2), pp. 141 – 162.
- Nakao, S. (2017) *A Grammar of Juba Arabic*. Doctoral thesis, Kyoto University.
- 仲尾周一郎 (2017) 「ベニシヤングル・アラビア語に関する覚書」 *Studies in Ethiopian Languages* 6, pp. 21 – 43.
- Neudorf, S. (2016) *Phonology of Berta*. Dallas, Texas: SIL International.
- Odisho, E. Y. (1988) *The Sound System of Modern Assyrian (Neo-Aramaic)*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- (2002) “The Role of Aspiration in the Transliteration of Loanwords in Aramaic and Arabic.” “*Sprich doch mit deinen Knechten aramaïsch, wir verstehen es!*”: 60 Beiträge zur Semistik. *Festschrift für Otto Jastrow zum 60. Geburtstag*, ed. by W. Arnold. & H. Bobzin, 488 – 501. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Owens, J. (1993) “Nigerian Arabic in Comparative Perspective.” *Sprache und Geschichte in Afrika* 14, pp. 85 – 176.
- (2006) *A Linguistic History of Arabic*. Oxford: Oxford University Press.
- Prochazka, T., Jr. (1987) “The spoken Arabic of Zabīd.” *Zeitschrift für Arabische Linguistik* 17, pp. 58 – 69.
- Rattray, R. S. (1913) *Hausa Folk-lore Customs, Proverbs, Etc.* 2 vols. Oxford: Clarendon.
- Ridouane, R., C. Gendrot, R. Khatiwada (2015) “Mehri Ejective Fricatives: An Acoustic Study.” *Proceedings of the 18th International Congress of Phonetic Sciences*. URL: <https://hal.archives-ouvertes.fr/halshs-01287685/> (last accessed on 25/1/2018)
- Robinson, D. (1982) “Fulfulde Literature in Arabic Script.” *History in Africa* 9, pp. 251 – 261.
- Schroepfer, J. (2015) “Ethnic Variation of */t̤/ in Aswan Arabic.” *Selected Papers from New Ways of Analyzing Variation* 22 (2), pp. 151 – 160.
- Serjeant, R. B. (1969) “South Arabia and Ethiopia: African Elements in the South Arabian Population.” *Proceeding of the Third International Congress of Ethiopian Studies*. Vol. 1. Addis Ababa: Haile Selassie I University. pp. 25-33.

- Simeone-Senelle, M.-C. (2002) "L'arabe parlé dans le Mahra (Yémen)." *"Sprich doch mit deinen Knechten aramaïsch, wir verstehen es!"*: 60 Beiträge zur Semistik. Festschrift für Otto Jastrow zum 60. Geburtstag, ed. by W. Arnold. & H. Bobzin, 669 – 684. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- (2005) "A Survey of the Dahalik Language, an Afro-Semitic Language Spoken Exclusively in Eritrea." Privately published. URL: <https://halshs.archives-ouvertes.fr/halshs-00319729> (last accessed on 25/1/2018).
- (2006) "Horn of Africa." *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics*. Vol. 2, ed. by K. Versteegh et al., 268 – 275. Leiden: Brill.
- Souag, L. (2017) "Tigre between ejectives and pharyngealization." *Jabal al-Lughat: Climbing the Mountain of Languages*. Personal blog. URL: <http://lughat.blogspot.jp/2017/01/tigre-between-ejectives-and.html> (last accessed on 25/1/2018).
- Troupeau, G. (1970) "Un vocabulaire arabe dialectal-éthiopien." *Mélanges Marcel Cohen: Études de linguistique, ethnographie et sciences connexes offertes par ses amis et ses élèves à l'occasion de son 80ème anniversaire*, ed. by D. Cohen, 333 – 342. The Hague: Mouton
- Tsereteli, K. G. (1978) *The Modern Assyrian Language*. Moscow: Nauka.
- Vanhove, M. (1995) "Notes on the Arabic Dialectal Area of Yafi' (Yemen)." *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies* 25, pp. 141 – 152.
- Versteegh, K. (2014) *The Arabic Language* (Second edition). Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Wagner, E. (1983) *Harari-Texte in arabischer Schrift: mit Übersetzung und Kommentar*. Wiesbaden: F. Steiner.
- Watson, J. C. & M. Al-Azraqi (2011) "Lateral Fricatives and Lateral Emphatics in Southern Saudi Arabia and Mehri." *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies* 41, pp. 425 – 432.
- Watson, J. C. & A. Bellem (2010) "A Detective Story: Emphatics in Mehri." *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies* 40, pp. 345 – 356.
- Watson, J. C. & B. Heselwood (2016) "Phonation and Glottal States in Modern South Arabian and San'ani Arabic." *Perspectives on Arabic Linguistics XXVIII: Papers from the Annual Symposium on Arabic Linguistics, Gainesville, Florida, 2014*, ed. by Y. A. Haddad & E. Potsdam, pp. 3 – 36. Amsterdam: John Benjamins.
- Watson J. C., B. G. Stalls, K. Al-Razihi, & S. Weir (2006) "The Language of Jabal Rāziḥ: Arabic or Something Else?" *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies* 36, pp. 35 – 41.
- Wetter, A. (2007) "Ethiopia." *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics*. Vol. 2, ed. By K. Versteegh et al., 51 – 56. Leiden: Brill.
- (2012) "Rhetoric Means of Didactic Amharic Poem from Wärrä Babbo." *Aethiopica* 15, pp. 176 – 203.
- Zeltner, J.-C. & M. Fournier (1971) *Notice pour suivre un enregistrement en arabe Salamat de la région du Lac Tchad*. Privately Published.
- Zeltner, J.-C. & H. Tourneux (1986) *L'arabe dans le bassin du Tchad: Le parler des Ulâd Eli*. Paris: Karthala.